

ミニトマト



育苗

床土(培土)

➔ ●畑の大将<青> 1~3%を培土に混和しておくか、1ポット当り30gほどを置き肥すると、徒長せずガッシリ充実した苗ができる。

散水時に使用

葉面散布・灌水をかねて、タツプリ散布。水だけの散水はせず、薄くても、どちらかを混ぜる。なるべく水やりを省略できるように。

➔ ●根っ酵素500倍液 →根を強く動かし、生長を促進、シオレ防止。
●花咲くCa液500倍 →茎葉を厚く充実させ、健全な体質を作る。
※播種後、接木迄、毎日~3日間隔、1000~2000倍液を交互散布で茎を太く。
※接木4日後から、3~7日間隔で、最初だけ1000倍、以後500倍で交互に、葉上からタツプリ散布します。ただしその時の苗の状態によって適宜どちらを散布するか決める。高温期の育苗ではCa液状の連用で節間の短い、充実した苗を作るのが効果的。
※移植時には 酵素液500倍をタツプリ散布して根を動かして下さい。
※定植5日前には、苗の仕上げに、Ca液を散布して充実させます。

苗のドブ漬け・植付け直後の灌水。

●根っ酵素500倍液 →活着・初期の深層への根張り促進。
※線虫・萎凋・青枯れ・かいよう病の軽減。モザイク・黄化萎縮の広がりもかなり抑制。

(10アール当り)

時期	方法	資材
本畑の地力作り	なるべく早い時期に投入し、なるべく深く耕耘しておく。	●ラクトバチルス 600g →排水がよく、深層まで肥沃な土を作る。 ●堆厩肥 2トン(なるべく多く。または有機物、米ヌカなら180kg以上) ※前作の茎葉は出来る限りスキ込む事。(ウィルス病株を除く) ※堆厩肥の量が少ない場合は複合肥料を施す。(各成分12kg) ●硫安 80kg(もし通常の複合肥料ならチッソ成分16kg程度) ※チッソは有機化・地力化して、ジワジワと効く。チッソを増やしても、植付け時には土壌EC:0.2以下と適正範囲になるので、半年以上の長期栽培(15トン)では硫安80~120kgと多肥を推奨。
本畑の整地時	整地・ウネ作り前に全面散布。 根を全面に伸ばすために、ウネ上への局所的な施用はしない。	●畑の大将<青> 80kg(以上) ※適正pH:6.0~6.5 ※カルシウム量はチッソ量と見合うように、多めの施用を推奨。 ●マンゾク粒状 60kg →根張り・生長促進、線虫・青枯れ・導管病の予防。 ※もし特に心配な園で農薬の土壌消毒をした場合は、毒性が抜けた後に米ヌカ等に混ぜて、ラクトバチルスを補う事。(同時施用可能)

(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
前半～栽培中 ※特に定植後半月間は、なるべく細かな世話をしない事。	定植後1ヶ月半、4段目開花前迄 根と体質を作る 灌水使用 ※以後も同様に、交互の灌水を半月または1月間隔で繰返すと効果的。 ※月1回だけ葉ツユをうつように。	● 根っ酵素2ℓ をチューブ灌水(倍率は200倍以上、適宜) ※定植後半月間、2段目開花後迄に、根を土の深層まで働かせるために、一度酵素液を加えてタツプリと灌水する。(ただしカルシウムが効いている事)この時期には既に根が20cm深・通路中央まで伸びて来る筈。 (なお、トマト類は是非とも畑に穴を掘っておき、根を観察する事) ● 花咲くCa液2ℓ をチューブ灌水(倍率は200倍以上、適宜) ※定植後1ヶ月、3段目開花の後1週間内に、Ca液を灌水する。これは1～3段目の果実と4～6段目の花芽を同時に支える大人の体質を作るため。異常茎(メガネ)対策となる。 更にその3～5日後に、酵素液の灌水をすると、以降の生長が旺盛になる。この時期まで原則として追肥は不必要。チッソを効かせない事。
追肥 ※必要分だけ、バランスをとって。	4段目以降・2段ごと、開花1週間後に 追肥 (1ヶ月ごと) 右記を同時に施用。	● 硫安 20～30kg [または アミノ酸液 10～20ℓ 灌水] ※トマト類では肥料は株から離して、なるべくすぐ効かないように施す。 ● 畑の大将<青> 20～30kg ※特にどちらかが必要と判断される場合以外は、硫安(チッソ肥料)を追肥する時には必ずカルシウムを同時施用する。(混合したまま長期間おかない事)
葉面散布	栽培中の草勢調節 葉面散布 (適宜、7日ごと交互に) ★右記は一例です。	● 根っ酵素 500倍 →根の強化・草勢維持・果実肥大・導管病予防。 ● 花咲くCa液 500倍 →乱形果・灰色カビ・スジ腐れ・尻腐れを減らす。 ※各段の開花3日前頃、酵素液で根を動かす。 (カルシウムが効いている事) ※各段の開花後4日目頃、Ca液で3段上の花芽分化をよくする。